

日本語学習者の聴解困難点調査に基づく「わかりやすい日本語」の提案

野田 尚史 (日本大学)

中島 晶子 (パリ・シテ大学)

村田 裕美子 (ミュンヘン大学)

中北 美千子 (名古屋外国語大学)

要旨

この論文では、日本語学習者の聴解困難点調査から、学習者にとってどんな日本語の表現が難しいのかを分析した上で、日本語を母語としない人たちに対してどのように話せばわかりやすくなるのかを提案した。

日本語学習者の聴解困難点を調べる調査として、日本語学習者に日本語母語話者と対話してもらった後、そのときの映像とともに音声を聞いてもらい、聞いた日本語をどう理解したかを自分の母語で話してもらった調査を行った。その調査結果をもとに、学習者が日本語を不適切に理解した部分をタイプ別に分類し、日本語をわかりやすく話す方法を提案した。

たとえば、学習者は「いいお天気が多いじゃないですか」のような肯定の意味の「じゃないか」を否定の意味だと不適切に理解することがある。そのような事例から、「じゃないか」を使わず、「いいお天気が多いです (よね)」のように話すという提案を行った。

【キーワード】 やさしい日本語, 話しことば, 日本語学習者, 聴解, 文法

Keywords: easy Japanese, spoken Japanese, learners of Japanese, listening, grammar

1 研究の目的

母語が異なる人たちとのコミュニケーションにおいては、自分の母語以外の言語を使ってコミュニケーションを行うことも重要であるが、自分の母語を使ってその言語を母語としない人たちにわかりやすく伝えられることも重要である。

この論文の目的は、(1)の調査・分析をもとに(2)の提案を行うことである。

- (1) 日本語学習者に日本語を聞いてもらい、どう理解したかを調べる調査をもとに、学習者にとってどんな日本語の表現が難しいのかを分析する。
- (2) 日本語を母語としない人たちに対してどのように話せばわかりやすくなるのかを具体的に提案する。

この論文の構成は次のとおりである。次の2で先行研究を概観し、3で調査方法について説明する。その後、4から7で調査結果をもとに「わかりやすい日本語」の提案を行う。4では質問についての提案、5では肯定否定についての提案、6では主語についての提案、7では省略についての提案を行う。最後に、8でまとめを行い、今後の課題を示す。

2 先行研究

「やさしい日本語」の初期の研究である弘前大学人文社会科学部社会言語学研究室(2015)では、「やさしい日本語」にするための12の規則が挙げられている。それを整理すると、語彙についての規則、表記についての規則、文法についての規則に分けられる。

語彙についての規則は、たとえば(3)のようなものである。

- (3) 難しいことばを避け、簡単な語を使ってください。

語彙については、暫定的にはあるが、当面、国際交流基金・日本国際教育協会(編)(2002)の級別語彙を使って機械的に対応することができる。

表記についての規則は、たとえば(4)のようなものである。

- (4) 使用する漢字や、漢字の使用量に注意してください。すべての漢字にルビ（ふりがな）を振ってください。

表記についても、機械的に対応しやすい。

文法についての規則は、(5)から(8)である。

- (5) 1文を短くして文の構造を簡単にします。
(6) 二重否定の表現は避けてください。
(7) 文末表現はなるべく統一するようにしてください。
(8) あいまいな表現は避けてください。

このうち(5)から(7)は機械的に対応しやすいが、(8)はどのような表現があいまいになるかに気づきにくく、対応が難しい。

この論文では、日本語を母語としない人たちにとって文法的にわかりにくい「あいまいな表現」を聴解困難点調査によって明らかにし、わかりやすくするための提案を行う。

なお、「やさしい日本語」については、その後、庵他（編）（2013）や庵他（編）（2019）など、さまざまな研究が行われてきた。しかし、聴解困難点調査をもとにした「やさしい日本語」の研究はほとんどない。

3 調査方法

日本語学習者の聴解困難点を調べる調査は、(9)と(10)のような方法で行った。

- (9) 学習者に日本語母語話者と対話をしてもらい、そのときの映像を録画しておく。
(10) 対話が終わった後、録画した映像とともにその音声を学習者に聞いてもらい、相手の発話をどう理解したかを自分の母語で話してもらおう。

この調査に協力してもらった日本語学習者は 42 名である。学習者の母語はフランス語が 15 名，ドイツ語が 15 名，英語が 7 名，イタリア語が 5 名である。学習者の日本語レベルは，全員，中級である。調査は，2014 年 11 月から 2015 年 7 月に行った。調査結果の一部は野田他（2021-）で公開されている。

次の 4 からは，この調査の結果をもとに，「わかりやすい日本語」の提案を行う。4 では質問についての提案，5 では肯定否定についての提案，6 では主語についての提案，7 では省略についての提案を行う。

なお，「やさしい日本語」という用語は「学習者にとって話したり書いたりするのが容易だ」という意味にも解釈されやすいため，ここでは「学習者にとって理解するのが容易だ」という意味を明確に表す「わかりやすい日本語」という用語を使う。

4 質問についての「わかりやすい日本語」の提案

質問についての「わかりやすい日本語」の提案としては，4.1 で「か」がない質問や上昇が弱い質問をしない」という提案を行い，4.2 で「否定の質問をしない」という提案を行う。

4.1 「か」がない質問や上昇が弱い質問をしない」という提案

「か」がない質問や上昇が弱い質問をしない」という提案は，文末に「か」がなかったり上昇イントネーションが弱かったりするなどして，質問していることがわかりにくい言い方をしないということである。

たとえば，(11)は「(あなたは) エンジニアをしながら日本語の勉強も前にしていたということか？」という意味であり，相手に確認を行う質問になっている。

(11) では，あの，ま，パソコンの仕事，エンジニアしながら，日本語の勉強も前にしてたっていう。

しかし、フランス語を母語とする日本語学習者はこれを聞いて、「(私は) エンジニアをしながら日本語の勉強もしていた」という意味であり、自分のことを述べているのだと理解した。

(11)のように文末に「か」がなかったり上昇イントネーションが弱かったりすると、日本語学習者は質問だということがわからないことがある。

「わかりやすい日本語」にするためには、質問をするときは文末に「か」を付けたり上昇イントネーションを強くしたりする必要がある。

4.2 「否定の質問をしない」という提案

「否定の質問をしない」という提案は、「どこかに行かなかったの？」のような否定の質問をしないということである。

たとえば、(12)は「どこかに行かなかったのか？」という意味の質問である。

(12) どっか、行かなかったの？

しかし、フランス語を母語とする日本語学習者はこれを聞いて、「どこにも行かなかった」という意味であり、自分のことを述べているのだと理解した。

(12)のように質問が否定の形になっていると、日本語学習者は質問だということがわからないことがある。それは、否定だということを理解する処理だけで精一杯になり、質問だということを理解する処理までは行えないことがあるからだろう。

「わかりやすい日本語」にするためには、質問をするときは「どこかに行かなかったの？」のような否定の質問ではなく、「どこかに行った？」のように肯定の質問にする必要がある。

5 肯定否定についての「わかりやすい日本語」の提案

肯定否定についての「わかりやすい日本語」の提案としては、5.1 で「確認要求を

表す「じゃないか」を使わない」という提案を行い、5.2で「しか～ない」を使わない」という提案を行う。

5.1 「確認要求を表す「じゃないか」を使わない」という提案

「確認要求を表す「じゃないか」を使わない」という提案は、「日本人は並ぶのが好きじゃないですか」のような確認要求を表す「じゃないか」を使わないということである。

たとえば、(13)は「日本人は並ぶのが好きだよね」という意味を表している。

(13) でも、なんか日本人って並ぶのが好きじゃないですか。

しかし、イタリア語を母語とする日本語学習者はこれを聞いて、「私は並ぶのが好きではない」という否定の意味だと理解した。

(13)のように文末に確認要求を表す「じゃないか」を使うと、日本語学習者は否定の意味だと思い、肯定の意味だということがわからないことがある。

「わかりやすい日本語」にするためには、確認要求を表す「じゃないか」ではなく、「日本人は並ぶのが好きですよね」のように否定の「ない」が入っていない肯定文を使う必要がある。

5.2 「しか～ない」を使わない」という提案

「しか～ない」を使わない」という提案は、「英語しか勉強しない」のような「しか～ない」を使わないということである。

たとえば、(14)は「日本ではほとんどの学校で英語だけを勉強する」という意味を表している。

(14) 日本ではほとんどの学校が英語しかやってないですねえ。

しかし、ドイツ語を母語とする日本語学習者はこれを聞いて、「日本の学校では英語を勉強しない」という否定の意味だと理解した。

(14)のように「しか～ない」を使うと、日本語学習者は肯定の意味だということがわからないことがある。「～ないといけない」や「～ないわけではない」のように「ない」が2つ入っていて肯定の意味を表す表現も、同じようにわかりにくい。

「わかりやすい日本語」にするためには、否定の「ない」が入っている「しか～ない」ではなく、「英語だけ勉強する」のように否定の「ない」や「ません」が入っていない肯定文を使う必要がある。

6 主語についての「わかりやすい日本語」の提案

主語についての「わかりやすい日本語」の提案としては、6.1で「主語を途中で変えない」という提案を行い、6.2で「主語を述語の後に置かない」という提案を行う。

6.1 「主語を途中で変えない」という提案

「主語を途中で変えない」という提案は、「原君はすごい。私は先輩なのですが、彼は別格です」のように途中で主語の変更をするのをやめるということである。

たとえば、(15)の「私、一応一つ先輩というか、一つ上なんです」は「私は原君より学年が1年上だ」という意味を表している。

(15) 原君はたしかにすごいですよね。ちょっと、私、一応一つ先輩というか、一つ上なんですけど、もう、彼は別格です。

しかし、ドイツ語を母語とする日本語学習者はこれを聞いて、「原さんは私より学年が上だ」という意味だと理解した。

(15)では、最初は主語が「原君」だが、その後、主語が「私」になり、その後また主語が「彼」(原君)に戻っている。このように主語が途中で変わると、日本語学習

者は主語が何であるのかがわからなくなることがある。

「わかりやすい日本語」にするためには、可能な限り、主語を途中で変えないで、「原君はすごい。彼は私の後輩なのですが、別格です」のように同じ主語が続くようにする必要がある。

6.2 「主語を述語の後に置かない」という提案

「主語を述語の後に置かない」という提案は、「それはおもしろそう。だけど、大変そう。集団行動が。」のように主語を述語の後に置くのをやめるということである。

たとえば、(16)は学生寮の伝統として新入生が「100 キロハイク」に参加する話を相手がしたのに対して発話した文である。「大変そう。集団行動が。」は「集団行動が大変そうだ」という意味を表している。

(16) おもしろそう。だけど、大変そう。集団行動が。

しかし、英語を母語とする日本語学習者はこれを聞いて、「100 キロも歩くのは大変そうだ」という意味だと理解した。

(16)のように主語を述語の後に置くと、日本語学習者は主語が何であるのかがわからなくなることがある。

「わかりやすい日本語」にするためには、主語を述語の後に置かないで、「それはおもしろそう。だけど、集団行動が大変そう。」のように主語を述語の前に置くようにする必要がある。

7 省略についての「わかりやすい日本語」の提案

省略についての「わかりやすい日本語」の提案としては、7.1 で「主語や目的語を省略しない」という提案を行い、7.2 で「述語を省略しない」という提案を行う。

7.1 「主語や目的語を省略しない」という提案

「主語や目的語を省略しない」という提案は、「日本ではお店が配達をしています。フランスでも [φ] していますか？」のように主語や目的語を省略するのをやめるということである。

たとえば、(17)の「フランスでもやっていますか？」は「フランスでもスーパーやお店が配達することをしているか？」という意味を表している。

(17) 宅急便よりももっと安く、あの、スーパーとかお店がよく配達するようなことはやってますね。フランスでも [φ] やっていますか？

しかし、フランス語を母語とする日本語学習者はこれを聞いて、何をやっているという意味なのかがわからなかった。

(17)のように主語や目的語を省略すると、日本語学習者は省略された主語や目的語が何であるのかがわからないことがある。

「わかりやすい日本語」にするためには、主語や目的語を省略しないで、「日本ではお店が配達をしています。フランスでもお店が配達をしていますか？」のように主語や目的語を言う必要がある。

7.2 「述語を省略しない」という提案

「述語を省略しない」という提案は、「いろんな国に行きました。ポルトガルやイタリア、デンマーク [φ]。」のように述語を省略するのをやめるということである。

たとえば、(18)の「ポルトガルとイタリアと、えっとー、あそこ、え、北欧、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク。」は「ポルトガルやイタリアや北欧の国々に行った」という意味を表している。

(18) フランスに来てから、いろんな国行きました。ポルトガルとイタリアと、えっと

一、あそこ、え、北欧、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク [φ]。

しかし、フランス語を母語とする日本語学習者はこれを聞いて、「ポルトガルやイタリアや北欧の国々に行きたい」という意味だと理解した。

(18)のように述語を省略すると、日本語学習者は省略された述語が何であるのかわからないことがある。

「わかりやすい日本語」にするためには、述語を省略しないで、「いろんな国に行きました。ポルトガルやイタリア、デンマークに行きました。」のように述語を言う必要がある。

8 まとめと今後の課題

この論文では、日本語学習者の聴解困難点調査をもとに、日本語を母語としない人たちに対してわかりやすく話すための提案を行った。(19)から(22)のような提案である。

- (19) 質問についての提案：「か」がない質問や上昇が弱い質問をしない。否定の質問をしない。
- (20) 肯定否定についての提案：確認要求を表す「じゃないか」を使わない。「しか～ない」を使わない。
- (21) 主語についての提案：主語を途中で変えない。主語を述語の後に置かない。
- (22) 省略についての提案：主語や目的語を省略しない。述語を省略しない。

今後の課題としては、日本語学習者の聴解困難点調査をさらに進めることが挙げられる。その結果をもとに、日本語学習者の聴解困難点を調査した野田他（2015）や野田他（2016）も参考にしながら、話しことばとしての「わかりやすい日本語」のより詳しい提案をしていく必要がある。今回は取り上げなかった提案としては、

たとえば「名詞修飾節を使わない」という提案や、「途中で補足的なことを挿入しない」という提案が考えられる。

これまでの「やさしい日本語」の研究は、書きことばが中心であった。話しことばについても研究を深めていく必要がある。

<付記>

この論文は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」と「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」、および科研費17K18503の研究成果である。

<資料>

国際交流基金・日本国際教育協会（編）（2002）『日本語能力試験出題基準 改訂版』

凡人社

野田尚史（他）（2020-）「日本語非母語話者の聴解コーパス」国立国語研究所、

<https://www2.ninjal.ac.jp/jsl-rikai/choukai/index.html>（2021年12月1日）。

弘前大学人文社会科学部社会言語学研究室（2015）「減災のための「やさしい日本語」」、

<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/EJ9tsukurikata.ujie.htm>（2016年10月

17日閲覧，2020年1月17日閉鎖）。

<引用文献>

庵功雄・イヨンスク・森篤嗣（編）（2013）『やさしい日本語』は何を目指すか—多文化共生社会を実現するために』ココ出版。

庵功雄・岩田一成・佐藤琢三・柳田直美（編）（2019）『〈やさしい日本語〉と多文化共生』ココ出版。

野田尚史・阪上彩子・中山英治（2015）「中級学習者が雑談に参加するときの聴解の

問題点」*The 22nd Princeton Japanese Pedagogy Forum Proceedings*, pp.142-152,

Princeton, NJ: Department of East Asian Studies, Princeton University,

https://pjpf.princeton.edu/sites/pjpf/files/past/22nd-pjpf/PJPF15_Proceedings_final.compressed.pdf (2021年12月1日) .

野田尚史・中島晶子・村田裕美子・中北美千子 (2016) 「日本語母語話者との対話における中級日本語学習者の聴解困難点」『ヨーロッパ日本語教育』20, pp.219-224, ヨーロッパ日本語教師会.

https://www.eaje.eu/pdfdownload/pdfdownload.php?index=234-239&filename=29_Happyo13_Noda.Nakajima.Murata.Nakakita.pdf&p=bordeaux (2021年12月1日) .

Proposal for “Easy Japanese” Based on Listening Comprehension Difficulties Encountered by Learners of Japanese

Hisashi NODA (Nihon University)

Akiko NAKAJIMA (Paris Cité University)

Yumiko MURATA (University of Munich)

Michiko NAKAKITA (Nagoya University of Foreign Studies)

Abstract

This paper starts by emphasising the importance of asking learners what they have understood from a conversation they took part in, as this is the very first step in establishing proper guidelines for how native speakers can promote better communication with learners. To this end, this paper examines certain patterns of confusion related to grammatical features.

To gather data, we recorded dialogues between a native speaker and a learner, and then asked the learners what they thought they understood. One example of a source of confusion that we identified was the negative form, *-nai*, embedded in the acknowledgement request *zya*